

日本イギリス哲学会関東部会 第 90 回研究例会

日時 2012 年 12 月 8 日（土） 16:00～19:15

場所 東京大学本郷キャンパス法文二号館 2 階・哲学研究室

プログラム

16:00～17:30（質疑応答を含む）

ロックと希少事象としての革命：経験的議論法の評価をめぐって

沼尾 恵（慶應義塾大学ほか 非常勤講師）

17:45～19:15（質疑応答を含む）

ヒュームにおける道徳的評価と一般的観点

相松 慎也（東京大学大学院）

関東部会担当

一ノ瀬正樹（ichinose◎l.u-tokyo.ac.jp）

山岡龍一（yamaoka◎ouj.ac.jp）

（◎を@にお直してください）

【会場案内】

本郷キャンパス法文2号館



最寄り駅	所要時間
本郷三丁目駅（地下鉄丸の内線）	徒歩 8 分
本郷三丁目駅（地下鉄大江戸線）	徒歩 6 分
湯島駅又は根津駅（地下鉄千代田線）	徒歩 8 分
東大前駅（地下鉄南北線）	徒歩 1 分
春日駅（地下鉄三田線）	徒歩 10 分

日本イギリス哲学会関東部会第 90 回例会報告要旨

2012 年 12 月 8 日 東京大学本郷キャンパス

ロックと希少事象としての革命：経験的議論法の評価をめぐって

沼尾 恵

ロックの『統治二論』（1689）の主たる目的は不正な統治に対する抵抗権を主張することであった。しかし同時に、この革命的な著作の終盤において保守的な側面も見受けられる。人民の抵抗権が「しばしば叛逆を引きおこす酵母になる」という想定される批判に対してロックはそうはならない、と論じている。ここで注目すべきは、ロックの議論が「むやみやたらに抵抗してはならない」という規範的な議論法ではなく、「実際にそうはならない」という経験的な議論法を使用していることである。このロックの議論に対して J. フランクリンは「これはロック理論がぎこちなく、そしておそらく出来ばえの悪い一つの箇所である」と評している。またその他の多くの研究者はロックの応答の議論法に言及するものの、特にそのことを重視することなく、どちらかといえば倫理的要素が完全に欠けていないことを強調することに関心を向けている。本報告の目的はこのような評価に対してロックの応答が自然であり、また独創的である、ということを論ずることである。本報告の第一部ではまず「理性的被造物」をキーワードにロックの自由主義的政治思想の大雑把な枠組みを明らかにする。その際、ロックの「権威主義的」な『世俗権力二論』（1660-2）から「自由主義的」な『寛容論』（1667）の自然法における理論的發展に焦点を当てたうえで、つぎに『統治二論』の抵抗・非抵抗論における自然法の役割を見ていく。その後、実践的・理論的というふたつの角度からロックの応答の自然さを解明する。本報告の第二部ではロックの体系を受け、規範的な議論法を用いなかったロックの応答の独創性を当時の抵抗論の思想的潮流と比較しながら明らかにする。最後に、個人主義と公共的秩序の両立を考えるうえで、ロックの応答がいかなる重要性を帯びるのか検討する。

ヒュームにおける道徳的評価と一般的観点

相松 慎也

本報告の目的は、ヒュームの『人間本性論』第三卷第三部における「一般的観点」の位置付けを明確にすることである。従来この概念は、道徳的評価の普遍性を確保するものであり、かつ道徳的評価成立の必要条件だと解釈される傾向にあった。ヒュームによれば、道徳的評価の基盤は「共感」であるが、共感はその本性上偏向を免れないため、評価に偏りと不一致をもたらす。そこでこうした評価を修正し、一致させるものとして一般的観点が導入されたのである。

しかし、これまでに提出されてきた「一般的観点は道徳的評価の必要条件ではない」とする解釈にも十分な説得力がある。そうした解釈によれば、一般的観点は、既存の道徳的評価を修正し、一致させる必要に迫られた場合にのみ採用される、いわば補助的な観点だということになる。この解釈の利点は、道徳的評価の条件を減らすことにより、日常の道徳実践に適う説明を与えられることである。

これに対し、本報告では「一般的観点は道徳的評価の必要条件である」とする解釈を擁護したい。というのも、ヒュームが一般的観点を導入したのは、誰に属していようとも同じ道徳的性質には同じ評価が与えられる、という一般的な期待を説明するためであり、道徳的評価にある程度の一致を前提しているように見受けられるからである。しかし、一般的観点があらゆる種類の道徳的評価に必要であり、かつ評価の普遍性を実現するものだと解釈してしまうと、道徳的評価それ自体が理想的なものとなってしまう。そこで本報告では、一般的観点は全ての道徳的評価に必要なのか、それとも大抵の道徳的評価に必要なのか、という二つの可能性を検討し、また、一般的観点に基づく道徳的評価の実態を吟味したい。そしてこの解釈が、日常の道徳実践に適うものであるか確認する。